

# 日本語教育理念

佐野 澄子

## 要 旨

グローバル化を迎えた現在、日本語教育は過去の強制的な日本語教育の時代とは違い、学習者中心の日本語教育に向かっているように思われている。しかし、果たしてそうだろうか。日本語教育は過去の強制的な日本語教育を本当に清算できたのであろうか。先行研究を中心に、現在の日本語教育の姿を探り、今後の進むべき道について考察する。

【キーワード】日本語教育理念、国際交流基金、国際文化振興会、グローバル化

## 1. はじめに

2005年の夏、立教大学院との合同セミナーで、早稲田大学大学院日本語教育科の平畑奈美氏の、国際交流基金日本語教育専門家プログラムでの活動報告を聞く機会があった。

その発表によると、「日本語教育専門家」の仕事の建前は「国際交流のため」、「現地ニーズに答えるため」、「世界の文化の多様性への貢献」だが、現実としては、プログラムは外交的手段であり、教師は外国で教えたいなどの自分の都合、学習者は日本と日本語への過剰な期待、各地の「日本語熱」からプログラムに参加しているとのことであった。その後日本に留学した学習者は、留学後に自信喪失や愛国主義的傾向を示し、「日本語は何の役に立つのか」という日本語学習への疑問を抱くようになる場合があるということも発表を通して知ることになった。

私が日本語教師になったきっかけは、自分が英会話を学ぶことが楽しかったことからスタートし、学習者にも同じ楽しみを感じてもらいたいと思って、日本語を教えてきたわけであるが、日本語を学ぶことが学習者にとってマイナスになるという現実があるとはその時まで想像もできないことであった。

## 2. 先行研究

日本語を学ぶことが学習者にとってマイナスにもなり得るという視点に立ち、日本語教育を見つめ直していくうちに、今日の日本語教育が戦前・戦中の日本語教育のイデオロギーから抜け出せていないことを指摘するいくつかの文献に出会った。

田中は姜との対談(1998)の中で、「アジアでは、戦前から戦争中にかけての日本語教育は、完全に植

民地化の一つの手段として行われていた。それが戦後、一回完全に解体され、考え直されたかということ、実は考え直されずに、戦後はなにか国際交流とか異文化交流とか、そういう交流という名のもとで、それにうまくすり変わって、構築されたものを根本的には見直さずにきている。今のアジアの国々との関係に関して、それをどうしてももう一回解体しないと、国際交流パラダイムというところをもう一回見直しておかないと、どうもうまいかないんじゃないかと思います。結果的に今はやっぱり上手くいつていないと思うのです」と語っている。

木村(2002)は、戦前から今日に至るまでの文献をもとに、国際交流基金の前身「国際文化振興会(KBS)」の「日本語普及理念」を明らかにし、国際交流基金の国際文化交流における日本語普及理念と比較し、「発展主義的な中央—周辺観にもとづく同化政策としての「日本語教育」の惰性は、今日の日本語教育のなかにも根強く息づいている。20世紀という文脈のなかで、「日本語教育」のあり方を問い直すことの意味はきわめて大きい」としている。

例えば、『国体の本義』\*1には、「今や我が国民の使命は、国体を基として西洋文化を摂取醇化し、以て新しき日本文化を創造し、進んで世界文化の進展に貢献するにある」とあり、一方、国際交流基金の国際文化交流における日本語普及理念、「海外における日本語普及の抜本的対応策について」においては、「文化を中心とする多面的な交流においては、日本語も含め多様な言語が使われることが自由で活発な交流と相互理解の前提になる」との判断がまず提示され、さらに、「我が国が、東西文化の影響の下に蓄積した高度の文化的・文明的所産を、日本語を通じて国際社会に還元していくことも、世界の

の日本の責任である。日本語の普及によって、我が国の諸情報の海外への伝達が容易となり、我が国の文化が外国人に、より深く理解されるとともに、日本人も、日本語を通じ諸外国の文化に接し得ることになる。諸国民が言語の背景にある異文化に、より深く接することは、それだけ新しい人類文化の創造と発展を期待させることになると記されているとのことである。木村はこれを「日本文明・文化の国際的優位性を定立することによって、日本語の普及が人類文化の創造と発展に寄与し得るものである、と説明するのである」とまとめている（下線は発表者による）。以上のように、『国体の本義』と、国際交流基金の日本語普及理念には非常に似た部分がある。

また、李(2004)は、「近代日本における言語的近代化と言語イデオロギー」について、「言語と近代との関係」、「国民語」の形成—言語とネーション」、「近代日本における言語イデオロギー」に分けて分析している。

「言語と近代との関係」においては、近代の見逃してはならない側面として「国民国家」の成立を挙げ、「近代とは全世界が「国民国家」の網の目でおおわれ、あらゆる空間がどこかの国民国家の領土となった時代であると言ってもよい」としている。そして、言語にとつての近代を「言語が国民国家の内部に囲い込まれた時代」ととらえることもできるとし、「国民語(national language)」の成立が重要になると考察している。

「国民語」の形成—言語とネーション\*2」においては、「国民語」という概念に含まれる二つの要素、言語とネーションの関係に注目し、近代国民国家を支える「ネーション」とは、「民族」のような自生的な人間集団ではなく、自立的な国家を構成しうる集団を指しており、ほとんどの近代国家では、国家が樹立された後になって「国民構築(nation building)」の作業が始まるとし、ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』の中で行った「言語こそが「想像の共同体」\*3をつくりあげる根源的な力をもっている」、「ネーションを構成するすべての人びとが、「ひとつの言語」を話していると意識することが、「想像の共同体」が生まれるための必要条件になっている」という考察を引用し、また、言語が「国民語」へと形成される過程を次のようにまとめ、「言語とネーションとの関係は、どちらかが

一方的に他方を規定するのではなく、相互的なものだと考えることができる」としている。

- (1)言語使用領域の拡張：話しことばでしか使われなかった言語や一定の地域でしか使われなかった言葉の使用領域を拡張すること
- (2)規範化：そうして現われた言語様式に一定の規則をあたえ、「国民語」としての公的な規範をつくりあげること
- (3)同質化：国家の領土内で話される多様な方言や異言語を排除し、「国民」の言語を同質化、均質化する過程
- (4)純化主義：言語のなかから「不純」とみなされた要素—それは方言の場合もあれば外国語の場合もある—を排除し、「純粹」な「国民語」を作ろうとする過程
- (5)威信付与：「国民語」に対して政治的イデオロギーを注入する過程

「近代日本における言語イデオロギー」においては、「国語」という概念に注目し、「国語」という用語が一般化する過程は、近代日本の国家的イデオロギーが膨張する過程と軌を一にしている」とし、言語政策に、「標準語」の設立、「言文一致」の必要性など様々な提言を行った国語学者上田万年(1867～1937)を取り上げ、国家を支えるイデオロギー的要素のひとつとして「国語」を制度化することの意味を、天皇制国家を支えた家族国家観と位置付け、次のようにまとめている。

「グローバリゼーションの危機に日本が襲われているという意識が強まれば強まるほど、そして、グローバリゼーションによって日本の固有性が失われるのではないかという危機感が増せば増すほど、この言語意識（国民的伝統としての「国語」を自然的実態としてみなす言語意識）は新たなかたちで復活するにちがいない」。

### 3. 日本語教育におけるジレンマ

私は今まで「もう時代は変わった、学習者は自由に日本語を学ぶことができる、日本語が身につけば学習者の役に立つ」と考え、教える技術を磨くことに力を注いできたが、自分でも気づかないうちに「同化政策としての「日本語教育」」に加担する可能性があることは非常に恐ろしいことだと思う。日本語教育に携わりながらも日本語教育に恐ろしさを感じるというのは、大きなジレンマとなる。

木村(2002)は、「戦後の日本語教育が戦前のそれから学ぶべきことは、日本語を、「日本人」に帰属させない道をひらくことであろう。それは、日本人だけではない—学習者のアクセントを住まわせる—われわれの日本語によって、日本の「日本語」の均質性を、内側から溶解していくことにほかならない」としている。

#### 4. 今後の課題

今後の課題としては、様々なことが考えられるが、まず「日本人だけではないわれわれの日本語によって日本の「日本語」の均質性を、内側から溶解していく」ためには、多様な日本語を認めつつそれでも残る日本語の共通点を探る、「様々なバックグラウンドを持つ人の日本語の共通点に関する調査」、また、「日本語教師ではない、一般の日本人が非母語話者の日本語をどう評価するか」という母語話者評価研究も興味深いところである。私自身の経験から言うと、日本語教師は学習者の誤用について厳しすぎる傾向があるような気がする。また、学習者に対する調査としては留学後に日本や日本語に関するイメージがどう変わったか、日本語を学んだことに対する意識調査が、日本語教師に対する調査としては、日本語を教えることに対するビリーフの調査、などが考えられる。不十分な発表であるが、「グローバル化と日本語教育」という今回のセミナーに当たり、日本語教育の意味を再度考える機会になれば幸いである。

#### 注

\*1.1937 年文部省が発行した国民数化のための出版物。記

紀神話にもとづき国体の尊厳、天皇への絶対服従を説き、社会主義・共産主義・民主主義・個人主義・自由主義を排撃。『広辞苑第五版』 岩波書店)

\*2. nation[the ～; 集合的に; 単数・複数扱い]国民《people は文化的・社会的統一体を、nation は政治的統一体を強調する》(『ジーニアス英和辞典第3版』 大修館書店)

\*3. アンダーソンによれば、近代国家を支える「ネーション」は、自生的な人間集団とは異なる。ネーションが成立するには、たがいに会ったこともなく、これから会おうことのない人々どうしを一つの「国民」を構成する仲間と感じさせなくてはならない。つまり、ネーションを構成するひとりひとりが、同一の空間と同一の時間の枠組みに所属すると意識しなければならない。アンダーソンはこうした近代的ネーションの特質を指して、ネーションとは「想像の共同体」であるという有名な定義を引き出した。(李研淑(2004) 「近代日本における言語的近代化と言語イデオロギー」 『建国大学師範学部日本語教育科創設 30 周年記念国際学術シンポジウム予稿集』)

#### 参考文献

姜尚中・田中望(1998)「対談 日本にとっての「多言語主義」」『言語』 Vol.27 No.8 大修館書店

木村哲也(2002)「「日本語教育」の執拗低音」『間文化の言語態』 東京大学出版会

李研淑(2004)「近代日本における言語的近代化と言語イデオロギー」『建国大学師範学部日本語教育科創設 30 周年記念国際学術シンポジウム予稿集』

小林ミナ(2004)「母語話者研究と日本語教育」『建国大学師範学部日本語教育科創設 30 周年記念国際学術シンポジウム予稿集』

さの すみこ／同徳女子大学大学院 日語日文学科 修士課程  
mashimaro\_ss@hotmail.co.jp